

News Letter

2020.3 第9号

Educational and Academic Support Organization

インフォームド・コンセント、ESD、そしてSDGs

教育研究支援機構長 佐野 誠

医学部で医事法制や生命倫理を教えていた1990年代の前半頃、インフォームド・コンセント（informed consent）という言葉の意味内容を教えるのに苦労した経験がある。「医師の患者に対するインフォームド・コンセントは絶対に必要」などと受講生に言っても、なかなか理解してもらえなかった。医療現場における具体的諸事例を示しつつ、時間をかけて説明した結果、ようやく彼らは納得したのである。爾来30年。いまやこの言葉は、研究倫理の領域でも頻繁に用いられ、一般の学生にも認識されるようになった。

奈良教育大学では現在、ESD（Education for Sustainable Development）やSDGs（Sustainable Development Goals）が教育・研究の主要な目標・課題のキーワードに掲げられている。一般にESDは、「持続可能な開発のための教育」、SDGsは「持続可能な開発目標」と訳される。これらの言葉に対して、実際にその意味内容を正確に理解している人はどれだけいるのか、かつてのインフォームド・コンセントと同じく、具体的なイメージが掴めないのではないのかといった疑問が出されるかもしれない。しかし心配は無用である。というのも、教育研究支援機構を支える5つのセンターがここ数年行ってきた教育・研究プログラムの多くが、まさにESDやSDGsの実践内容にほかならないからである。たとえば、次世代教員養成センターや自然環境教育センターの『紀要』に掲載されている論文題目を学術リポジトリで検索して見れば、このことは一目瞭然である。まずは関連する幾つかの論文を読みながら、具体的なイメージを掴んでいけば、これらの言葉の意味内容の一端がわかるはずである。

新たに生成された概念を理解するには時間を要する。しかし、教育研究支援機構の5つのセンターが、横の連携を図りつつ、ESDやSDGsの意義を学内外に粘り強く発信していけば、必ずやこれらの言葉は、将来、確実に、一般の人たちにも浸透していくことであろう。地球上の「誰一人取り残さない（No one will be left behind）」というSDGsの崇高な理念に向かって日々前進していきたいと願うものである。

奈良教育大学教育研究支援機構

図書館（教育資料館を含む）

次世代教員養成センター

- ・ 情報教育部門
- ・ ESD・課題探究教育部門
- ・ 情報基盤部門

国際交流留学センター

特別支援教育研究センター

- ・ 発達支援部門
- ・ 教育実践支援部門

理数教育研究センター

- ・ 教育プログラム推進部門
- ・ 先端科学教育部門

自然環境教育センター

- ・ 教育研究開発部門
- ・ 地域開放部門

【図書館】

1. 図書館の取り組み

図書館では、蔵書やラーニング・コモンズ等の施設の利用促進を図るため様々な取り組みを行いました。

(1) ラーニング・コモンズの学習環境改善

ラーニング・コモンズの有効活用として、授業利用の推進を各教員に呼びかけ、多くの授業や授業イベントに活用されました。授業活用以外にも、奈良県教育委員会との高大連携事業「次世代教員養成塾」やカンボジア国教員養成研修、音楽教育講座のキッズ・サウンドラボ・アートプロジェクト、美術教育講座の幼児造形ワークショップ等、幅広い分野での活用が広がっています。

ラーニング・コモンズの授業活用等を行った教員へのアンケートを元に、大人数の授業等に対応するための椅子の追加や演台としても使える昇降式テーブルの設置、少人数でのグループワーク用の短焦点プロジェクタ・映写対応ホワイトボードの導入など、学習環境の改善を図りました。



ラーニング・コモンズの授業利用

(2) デジタル化資料送信サービスの開始

国立国会図書館図書館向けデジタル化資料送信サービスへの参加を委員会で検討し、絶版等の図書をデジタル

画像で閲覧できるサービスを7月1日に開始しました。



(3) 教育の動向に対応した学習資料の充実化

小学校英語必修化に合わせ、英語教育講座教員の協力を得て、TOEFL等の英語能力テストの教材や英語多読本を整備し、英語コーナーの充実化を図りました。

また、プログラミング教育が導入されるにあたり、重点収集資料としてプログラミング教育関連資料を授業担当教員の協力を得て整備しました。さらに、小学校・中学校で道徳教育が教科化されたのに伴い、授業担当教員からの推薦を得て、重点収集資料として道徳教育関連図書を整備しました。



(4) 図書館紹介動画の作製

学生サポーターとの協働により、新入生向け図書館紹介動画を作製しました。新入生オリエンテーション等で活用する予定です。

(5) 授業関連図書コーナーのレベル付け

シラバス掲載図書と各学問分野の初学者が最初に読んでもらいたい図書を揃えた授業関連図書コーナーについて、図書館運営委員会委員の協力のもと「初級」「中級」のようにレベル付けを実施しました。レベル付けされた図書には「初級」「中級」等のシールが貼られ、一部の本の帯には教員からの推薦コメントを掲載しています。また、ブックガイド「〇〇の本棚(書道教育の本棚、文化財科学の本棚など)」を作成し学生に配布しました。



授業関連図書コーナー

(6) ミニ展示「新元号「令和」と万葉集」の開催

新元号発表に合わせて所蔵する戦前期の万葉集を展示するミニ展示「新元号「令和」と万葉集」(4/3-5/14)を開催し、新聞やテレビの取材を受けました。



ミニ展示「新元号と「令和」と万葉集」

(7) 拡大教科書の導入

特別支援教育の授業ニーズに応え、目の見えにくい弱視の児童、生徒のための拡大教科書を導入しました。

2. 教育資料館



新薬師寺旧境内展

平成30年度の耐震工事を終え、内装や展示ケースもリニューアルされ、令和元年5月7日に開館しました。常設展では、耐震工事前から展示していた新薬師寺旧境内で出土された遺物のほか、本学構

内の北西に位置する吉備塚古墳から出土された歴史的価値の高い三埴環頭大刀柄頭や画文帯環状乳神獣鏡も展示され、正面ホールでは、耐震工事中の様子を写したパネル展示も行われました。

また、教育・研究や課外活動の成果発表の場として、7件の企画展示が行われたほか、本学構内で開催された奈良市教育委員会主催の「世界遺産学習全国サミット in なら」では、奈良市内中学校茶道部生徒の日頃の成果発表の場として「初令茶会」が開催されました。



初令茶会

【次世代教員養成センター】

◆ ESD・課題探究教育部門 ◆

1. 教員養成カリキュラム開発領域

2019 年度入学生から学部のカリキュラムが一部変更になりました。次世代の教員に求められる資質能力を育むために、いくつかの授業が新設されたり、再編されたりしています。そのうちの目玉の一つが、2 年生必修の「学校フィールド演習Ⅰ」です。

本科目は、副題として「学校体験活動」という名前がつけられている通り、大学の講義室ではなく、実際の学校現場に出向き、授業観察や指導支援等を行うことを通じて、子ども理解を深めることを目的としています。同時に、教員という仕事のやりがいや面白さ、難しさについても、実体験を通じて感得することもねらっています。全国の教職課程でも、実施されているところはありますが、本学のように、全学生に必修化しているところはほとんどありません。教員養成のフラグシップ（旗艦）である教育大学の社会的使命にも鑑み、2019 年度学部カリキュラム変更の一環として、実施に踏み切ることになりました。

学校フィールド演習Ⅰは、幼稚園、小学校、中学校・高等学校の3つのクラスに分かれて実施します。それぞれのクラスのコーディネーターを、本領域の3名の教員が担当します。2019 年度は、本格実施に向けて、学内の関連する部署と連携を図りながら、さまざまな準備作業を行ってきました。

2020 年度から、280 名の新2 年生たちが、本科目の受講を通して、奈良市立学校や附属学校園の現場で支援活動に携わります。学校現場の空気に触れながら、大学の講義室ではなかなか得ることのできない「実践知」を、できるだけたくさん、そして多様に、身につけていってほしいと願っています。

（資料）学校フィールド演習Ⅰ シラバス（抜粋）

目的：

学校園における授業支援、学習支援等の活動（スクールサポート活動）を通して、授業・保育場面における子どもの「姿」についての理解を具体的に深めることを目的とする。

到達目標：

1. 授業・保育場面における子どもの「姿」の特徴について、具体的に説明することができる
2. 子どもの「姿」の「背景」について、協議等を通じて推測することができる。
3. 教師の指導（かかわり）のありようについて、子どもの「姿」と「背景」に関する考察に基づいて、説明することができる。

Cuffet：

5. 子ども理解

授業計画：

- 第1回 実施ガイダンス
- 第2回 フィールド活動基礎論
- 第3回 授業・保育場面における子どもの姿①
- 第4回 授業・保育場面における子どもの姿②
- 第5回 授業・保育場面における子どもの姿③
- 第6回 フィールド活動（1）
- 第7回 フィールド活動（2）
- 第8回 フィールド活動（3）
- 第9回 フィールド活動（4）
- 第10回 中間報告会（ポスターセッション）
- 第11回 フィールド活動（5）
- 第12回 フィールド活動（6）
- 第13回 フィールド活動（7）
- 第14回 フィールド活動（8）
- 第15回 成果報告会

2. ESD・教材開発領域

ESD と SDGs

ESD・教材開発領域では、ESD の普及・推進を目的に近畿 ESD コンソーシアムを運営し、現職教員・学生・大学教員が融合して（テトラモデル）、ESD の研究を進めています。

最近、企業の方を中心に、SDGs（持続可能な開発目標）のバッジを付けている方をよく見かけるようになりました。SDGs というのは、2015 年の国連持続可能な開発サミットで採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の中心である、2030 年

までの達成を目指す17の目標です。ESDは、目標4:教育に明記されているのですが、ESDを学ぶことで、持続可能な社会づくりに参加・参画するようになることから、すべてのSDGsがESDに期待していると、言われています。

ESDで大切なこと

ESDは、人々の社会づくりに関する価値観と行動の変容を促す教育です。行動の変容を促すには、知識も重要ですが、感情がより大きな役割を果たします。そこで、ESDでは体験的な学習活動を重視していますが、特に次の3つの経験ができるような体験ができるといいと思います。

①利他的行動をする経験

②自然との交歓（自然の中で活動すると気持ちがいい）がある経験

③人との交歓（人と一緒に活動するのは楽しい）がある経験

このような体験的な学習活動を繰り返すことで、「世代間・世代内の公正を意識する」、「自然環境・生態系の保全を重視する」、「人権・文化を尊重する」といったESDの価値観を育てることができます。

ESD 学生活動を支援

大学生のみなさんにも、以上のような体験をすることが大切であると考え、ボランティア活動への支援を行っ



写真洗浄の様子

ています。昨年度はユネスコクラブの学生と ESD ティーチャープログラム受講学生が中心となって、西日本豪雨災害復興ボランティアとして、被災家屋の片付けなど現地での支援活動に11回参加し、帰ってからはその報告会を開催しました。また、今年度も引き続き倉敷市真備町を訪問し、被災した写真を洗浄するボランティア活動を行っています。これらの取組が認められ、ガールスカウト日本連盟が主催するコミュニティー・アクションアワード100のチャレンジ賞を受賞した他、一財団法人学生サポートセンター主催の第17回学生ボランティア団体表彰式においても表彰状を贈呈されました。

その他、今年も徳島県での柚子刈りボランティア、滋賀県近江八幡市でのヨシ刈りボランティアにも参加しています。



柚子刈りの様子



ヨシ刈りの様子

3. 学校・地域教育支援領域

(1) スクールサポーター研修の実施

奈良市教育委員会と連携して、スクールサポーター2級研修会を4月27日(於:本学、出席者66名)および5月18日(於:本学、出席者46名)に開催しました。

新入生オリエンテー

ションで周知するとともに、学生ボランティア説明会(4月17日)を10教育委員会の参加のもと実施しました。また、チラシのQRコード、センターホームホームページでの申し込み、フェイスブック等を活用して広報に努めています。

なお、2級はスクールサポートをするにあたっての基礎的な学びを中心にした3時間の講習です。

級	講座名	時間	形態	内 容
スクールサポーター2級	講義1 スクールサポート原論	60分	講義	人権、個人情報、守秘義務等をはじめ、支援者(サポーター)としての基本的な倫理と、スクールサポーターにとっての認証制度の意義について(認証制度の概略を理解する)理解する。
	講義2 スクールサポート方法論	60分	演習 講義	学校組織・経営や学級運営という観点から、子どもの発達・特性に応じた「支援者」として求められる役割、位置づけ、複数の支援方法について理解する。
	講義3 こども理解論	60分	講義	具体的な事例を通じて「発達障害」のある子どもの行動傾向や、学びに困難を持つ子どもについて理解する。

さらに、スクールサポーター1級研修会を10月、11月に実施し17名の受講がありました。

(2) 教育支援人材認証協会「こどもパートナー」養成講座の開催

教育支援人材認証協会の「こどもパートナー」養成講座を8月31日に実施しました。参加者は、4講座の受講者が66名、その中で認証申請者は53名でした。高校生

から、学童保育や地域のボランティア活動で子どもと関わる方など多様な受講者が熱心に講義を受けていました。

(3) 不登校などの小・中学生のための居場所「ねいらく」のとりくみ(平成29年12月19日より開設)

○概要

校内施設である寧楽館において、不登校などの小・中学生のための居場所・学習支援は、毎週火曜日15時～17時30分の間の展開で、学生ボランティア10名が関わ

ってくれています。利用者は、設立当初(2017年12月)は4名でしたが、定期的来訪者13名を中心に20名ほど(令和2年2月末現在)となっています。地域的には、奈良市を中心に生駒市、大和郡山市、田原本町、橿原市、京都府南部などから来てくれています。ほぼ毎週来ている子もいれば、不定期に参加する子など、子どもの状況により多様です。また、問い合わせ・相談件数も数十件あります。

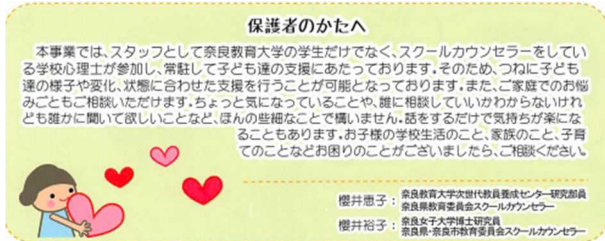
○事業の趣旨

この事業の趣旨は、次の通りです。

- 不登校の児童・生徒など問題を抱える子ども達の放

課後の居場所づくりを行っています。

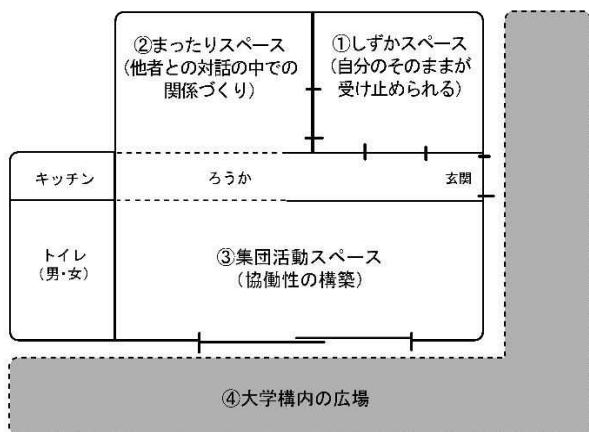
- 本事業では、居場所支援による子どもの社会性や他者とのコミュニケーション力を育むことを中心に、学習支援も展開しています。



- 奈良県、奈良市で活動するスクールカウンセラー2名が運営スタッフとして参加することで、子どもの心身の育ちを支援するとともに、保護者の教育相談にも対応することも目的としています。
- この事業は、子ども一人ひとりの心身の育ちや学びを支えるための取り組みであるとともに、子どもを通して家庭の支援にもつながるものでもあります。
- 本事業では、奈良教育大学の学生がボランティアスタッフとして参加しています。そのため、今後教員として働く学生たちの教育臨床現場での臨床力を高めることも期待できると考えます。

○居場所の空間について

居場所「ねいらく」の拠点である寧楽館には、トイレ・洗面所（男女別）とキッチン以外に、3つのスペースがあり、それが特徴となっています。



- 「しずかスペース」：静かな環境で、面談したり、学習

したり、静かに過ごしたりしたい場合に利用します。

- 「ゆったりスペース」：カーペットを敷いて、2～3人で話をしたり遊んだり、少し学習を見てもらったり、ゆっくり活動する場合に利用します。

- 「集団活動スペース」：がやがやと話をしたり、ボードゲームをしたり、イベント活動をしたりして、集団で過ごすために利用します。

このように、子どもの状況や活動の種類によってスペースを分け、子どもたちがストレスなくそれぞれの活動に集中できるように配慮しています。

(4)「不登校・ひきこもり支援者養成セミナー」の実施

(2019年度 11月16日、11月30日、1月11日)

セミナーは、子ども・若者支援に従事する者、学校の教員、当事者の家族を対象としています。目的は、不登校やひきこもり等の生きづらさを抱える子ども・若者への効果的な支援

のために支援者のナレッジ（知識）、スキル（技術）、マインド（価値）に焦点を当て、支援の具体的な対応方法を考え合い、実践することです。

具体的には、下記に関する講義と活動を展開しました。

- ① 自立支援と専門性について、子ども・若者支援の枠組み（「第三の領域」、「子ども・若者自立モデル」）に基づいて理解を深める。

- ② 精神疾患、発達障害、認知行動療法、セラピーなどについて理解を深め、どのようにセルフエスティームを高めると良いのか考え合う。
- ③ペアレント・トレーニングの考え方を学ぶことによって、子どものセルフ・エスティームを高めつつ親子の関係を良くする具体的対応方法を学び、実践することを目指す。
- ④ 支援従事者と教員は事例検討を行うことにより、インターク⇒アセスメント⇒プランニング⇒インタベーション⇒モニタリングの手法を用い、支援の視点、各団体・機関の持ち味・強みと課題、連携のあり方を考えあう。
- ⑤ 当事者家族は、当事者に関わる悩みや問題について交流しあい、情報交換と気持ちを共有する機会とする。

	11月16日	11月30日	1月11日
9:30～11:00	第三の領域としての子ども・若者支援	子ども・若者の貧困・虐待・人権	発達障害について
11:10～12:40	子ども・若者支援の基礎概念	精神疾患をともなった子ども・若者への支援	ペアレント・トレーニング
13:30～15:30 (11/16と11/30のみ15時まで)	ソーシャル・ワークについて	マルトリートメントと子どもの育ち	事例検討会

※事例検討会は、当事者家族の方は聴講いただけません。ご了承ください。

場所：奈良教育大学 講義棟 101教室
講師：主田周二(奈良教育大学 次世代教員養成センター 教授)
櫻井恵子(奈良教育大学 次世代教員養成センター研究員/關東市教育委員会スクールカウンセラー)
櫻井裕子(奈良教育大学 次世代教員養成センター研究員
奈良県・奈良市教育委員会スクールカウンセラー)

セミナーの受講者は、58名（奈良県青少年・社会活動推進課、奈良県教育委員会、奈良市社会福祉協議会、学校教員、適応指導教室、スクールソーシャルワーカー[SSW]、NPO 団体、当事者家族など）で、全日程修了者は14名でした。

（5）『不登校・ひきこもりに関する保護者支援ガイドブック』改訂版作成（2019年8月刊行）

不登校の状態にある子ども・若者の保護者、また不登

校やひきこもりの事柄に関わっておられる方々にとって不登校に関する理解と支援方法についての理解を深めるための情報誌として、『不登校の理解と対応ガイドブック—保護者編—』を2019年3月に3000部作成し、県内小中学校、教育・福祉関係機関・団体などを通じて、保護者ならびに支援者に配布しました。この『ガイドブック』が好評により半年を経ずに払底したため、必要な修正を加え改訂版を発行しました。

改訂版の目的は、第1版と同様に、不登校の子ども、保護者が、その地域、学校、進路選択などを含めた家庭生活の中で抱える疑問や困難に対してどのように

対応していくと効果的な支援ができるのかについて、その基礎概念と支援方法を具体的に提示することです。基礎概念は、①不登校

の定義、②居場所概念、③自尊感情論、

④自立について、⑤

対話のすすめを提示しています。また、具体的支援方法は、無理な登校刺激をすることなく子どもの心のエネルギーを減らさないで、登校したり、休養を取ったりする方法について示しています。学校の先生たちと上手に関わりながら、子どもへの対応をすると子どものセルフ・



もくじ	
刊行にあたって.....	2
私たちが大切に考えていること.....	4
不登校の定義とシグナル / ①のエネルギー-自律-支援の発達し 居場所 / 自尊感情 / 対話のすすめ / 自立とは.....	
家庭での困りごとと対応.....	14
家庭でできる不登校支援 / 原因ときっかけ 起立性調節障害 / 身体症状や行動の変化 生活の乱れ / 携帯電話・インターネット・ゲーム やる気の育て方 / カウンセリング.....	
学校との関係と対応.....	26
学校との連絡 / ②のエネルギー-自律-支援の発達し 保護者-学校-教育支援センター / 学習サポート-相談-学校行事 監や監行事.....	
発達障害とペアレント・トレーニング.....	37
発達障害について ペアレント・トレーニング.....	
子どもの精神疾患.....	42
子どもの主な精神疾患 / 自傷行為 精神疾患を抱えた子どもへの対応 / 治療法.....	
第三の領域へのすすめ.....	49
第三の領域 / 進路 居場所 / ねらい（奈良教育大学）.....	
あとがき.....	55

エスティームが低くならず、不安感を煽り立てないといったことを含め、子どもの中に心のエネルギーが溜まり、親や友人、先生、他人と繋がりが出来てくると子どもは少しずつ行動を始めることについても触れています。

これらの情報は不登校・ひきこもりの当事者目線に立ったものとするので、より現実に対応した内容となるように工夫しています。

(6)『子ども・若者支援に従事する者の専門性—基礎的ガイドブック—』作成 (2020 年 3 月刊行)

今年度も実施した支援者養成セミナーなどの成果ならびに研究の展開を踏まえた研修テキスト試行版です。作成の趣旨は以下の通りです。

- ・ 子ども・若者支援に関わる人たちの「共通基礎レベル」の知識と方法論、大切にすべき価値についての養成・研修テキストの試行版とする。
- ・ 科研プロジェクトで取り組んでいる 4 領域（歴史・理論研究領域、支援論・方法論研究領域、子ども領域、若者領域）の取り組みを視野に入れつつ、支援論・方法論研究領域での研究・取り組み・実践の実績を踏まえて作成する。
- ・ 具体的には、支援の方法論、専門性の枠組み研究の整理を一定程度反映した表「ナレッジとスキルの要素（試案）」に即して作成する。
- ・ このガイドブックの制作は、支援の現場において、明確な枠組みを持った養成・研修の教材やカリキュラムが不十分な現状を踏まえた取り組みとする。

来年度、検討・分析を重ね、専門性の枠組みと研修教材の改訂を進めていきたいと思っています。

(7) ボランティアサポートオフィスの活動

主には次の 3 つの活動があります。

・ 外部の団体からの要請で学生をボランティアとして派遣

多くのボランティア要請があります。実際に学生が参加したものには、平城京天平祭の「市の再現」、学校の健康診断の補助、不登校生徒の学習サポート、なら燈花会のサポーター、子ども食堂の活動補助、家庭裁判所関連のボランティア、子どもの体験活動「もうひとつの学び舎」の運営協力など、といったことが挙げられます。

・ 学生スタッフによる自主活動

学生スタッフは週 1 回会合を持ち、自主的な活動を行っています。「ひまわりプロジェクト」は東日本大震災の塩害対策で植えられたひまわりを通して、震災を忘れずに次の世代へ伝えていこうと、小学校などでひまわり栽培の活動を続けています。今年はひまわりオイルでろうそくを作り、協力者に届けました。海外の子どもたちにワクチン代を寄付する目的で、ペットボトルのキャップ回収を続けています。地域からの協力があります。HUG(避難所運営ゲーム)は災害時の避難所運営についてゲームを通して学ぼうというもので、年に数回、学校や公民館で教員子ども、地域の人と一緒に体験しました。



2019 年 8 月 23 日 HUG の体験(富雄中学校)

・ 東北教育復興支援

東日本大震災後、東北への支援を継続しています。宮城教育大学と連携して2月に気仙沼市の小学校で教育活動と被災地の現状を知る活動を行いました。短期間ですが、被災地やそこに暮らす人々の状況を知ることは、学生にとって有意義なことです。今回も希望者が多く、選考に困る状況でした。

4. 教育臨床・学校カウンセリング領域

教育臨床・学校カウンセリング領域およびESD・教材開発領域の合同主催により、8月4日（日）に、「テレジン収容所の子どもたち」の公開講座を開催しました。講師は、米国New Mexico大学の美術教育名誉教授で長年アートセラピーの分野で教育・研究に従事されてきたLinnney Wix先生でした。今回米国大使館の助成金で来日され関西で講演会を開催することができました。

本テーマで開催しました理由の一つには昨今の平和を脅かす状況を鑑み、ぜひこの機会に私たちの生きているこの世界について、また平和について一緒に考える機会を持ちたいと思ったからです。また今回の企画の学校カウンセリング領域の企画チームのメンバーは偶然アートセラピーという自己表現を使った心理的支援の専門であることからこのような機会を設けることができました。



テレジン収容所とはチェコ共和国にある小さな要塞の町で、第二次世界大戦時にナチスドイツが特別居住区を作り、多くのユダヤ人を収容した場所です。このテレジンを通過して膨大な数の人々がアウシュビッツに送られ、殺害されました。そこにいた15,000人ほどの子どもたちの中で、生存者は100人に満たなかったと言われています。

そこで一人の画家であるフリードル・ディッカー・ブランデイズは子どもたちに絵画や詩・ものづくりを教えレジリエンスを育み、生きる力を引き出しました。フリードルがどのように子どもたちに働きかけたのについての詳細を調査するために、Linnney Wix先生は2013年フルブライト研究員としてプラハで過ごし、Charles University(チャールズ大学)とJewish Museum of Prague(プラハのユダヤ人博物館)の助成のもと共

同研究を行ってられました。調査の中で、テレビジョン収容所で生き残った方々へのインタビュー調査を行い、そこから得た知見を報告してくださいました。このフリードルの偉業については、平成24年から国語の6年生の教科書にも掲載されています。教科書の本文を書かれた野村路子氏も、当日わざわざ関東から参加していただけていました。

フリードル・ディッカー・ブランデイズは1898年7月30日にウィーンで生まれ、ウィーンにて「子どもの自由表現の父」であるフランツ・チゼックやヨハネス・イッテンのもとで美術教育を学びました。その後当時前衛芸術運動の拠点であったバウハウスにおいて、ポール・クレー、オスカー・シュレマー、ゲオルク・ムシャ、ヴァシリ・カンディンスキーらとともに学び、そこで徹底的に対象物や自分の内面、あるいは思考を「見ること」の重要性を学び、「審美的共感」の概念に至りました。

フリードルは自らもユダヤ人であるが故にテレビジョンへ送られました。1家族50kgしか持ち込むことを許されない中、家に残っていたありったけの紙や絵の具をカバンに詰めたのは、そこで出会うであろう子どもたちにとって絵を描くことは生きる力になることを固く信じていたからです。

公開講座の後半部分では、実際にフリードルが行っていたアートのレッスンを参加者に体験してもらいました。色の研究・素材の研究・質感の研究・植物の研究の4つのテーブルが設けられ、参加者はそこに行って自由にそこでのテーマを楽しみました。当時はちゃんとした画用紙もありませんし、チラシの裏を使ったり様々な工夫がなさ

れたようです。参加者の感想からは、「現代を生きる日本の子どもたちは物質に恵まれ、ものをつくる重要性について忘れがち・・・どんなに便利で進化した世の中でも原点であるものづくりを見つめ学校活動に取り入れていきたい」「ユニバーサルの要素が多く、特別支援教育にも活用できるように思いました」「実際のワークの最後にはもっと描きたいと思ったし、それが次に続く意欲や希望にもつながると思いました」という感想をいただきました。

◆情報教育部門◆

情報教育部門では、教員のICT活用指導力向上に資することとして、教材開発や公開講座、奈良県内の自治体と連携した教員研修を実施しています。

『教員養成・研修テキスト（情報教育）―ICT活用指導力UPのためのハンドブッカー』の追補教材として、令和2年度より順次施行する新学習指導要領での位置づけ等について整理した教材『情報教育からみたプログラミング教育』を、奈良教育大学出版会より2019年03月31日発行しています。



この教材を活用した研修として、五條市教育委員会の協力を得て本学が五條市牧野公民館で開催している「現

職教員のための公開講座」の1つとして、「プログラミングに挑戦」(12月25日開催)と題した研修を担当しました。研修では、学校現場で利用されているプログラミング環境や教材を紹介して実際に体験する演習を通じて授業上での扱い方等についてディスカッションするとともに、新学習指導要領において、学習の基盤と位置づいた力とこれらのICT活用の関係性について事例を交えて紹介しました。受講者からは、「体験活動を通してわかりやすく、丁寧に説明して頂けたので次回があればまた参加したいです。ありがとうございました。」「来年度から本格的に始まるプログラミング教育をどのようにして教育課程の中で実践していけばよいか、考えるきっかけを頂きました。ありがとうございます。」などの感想を頂きました。



また、五條市立西吉野小学校からの要請をうけて、授業におけるプログラミング活用へのサポートとして、研究授業への協力とともに、「プログラミング的思考力の育成とは」というテーマで7月22日に教員研修を実施しました。新学習指導要領や手引等に記載されている内容を元に、実践事例などを紹介した後、実際に画面上でのプログラミングを体験したり、車を制御したりという活動を通じて、指導時の留意点や、日々の活動でプログラミング的思考を育成する活動について考え、これからの取り組み方について深まる研修となりました。



◆情報基盤部門◆

情報基盤部門(情報館)では、基幹ネットワークや基盤システムを運用しており、安全・安心・安定した情報システムサービスの提供を努めています。これらのネットワークやシステムは、おおよそ5年で更新を行っています。この記事執筆時点(2020年3月)において、更新作業真っ只中ですが、2020年4月からの主な変更点を紹介したいと思います。

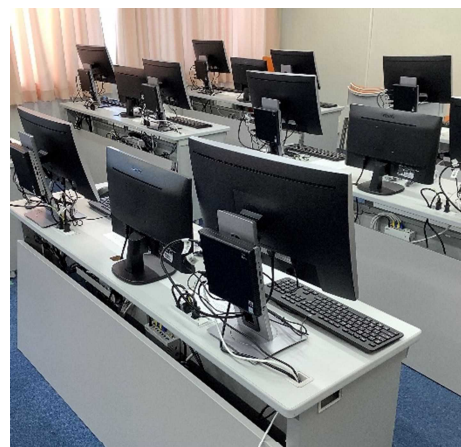


図1：更新作業中の教室(情報館 2F 演習室B)

最も大きな変更点としては、メールアドレスとwebメールサービスになります。メールアドレスについては、教職員については「ユーザ名@nara-edu.ac.jp」から「ユーザ名@cc.nara-edu.ac.jp」に、学生が「a 学籍番号@student.nara-edu.ac.jp」から「a 学籍番号@stu.nara-edu.ac.jp」に変更になります(学内の各組織が利用しているメーリングリストは変更ありません)。また、webメールについては、新しく2要素認証等に対応したOutlook

on the web を利用することになりました。これにより、利用者のみなさまに、安全かつ利便性の高いサービス提供が可能になりました。

そのほか、共同利用 PC（Windows 10、Microsoft Office2019）、e ラーニングシステム（Moodle 最新版）、無線 LAN サービスなど情報基盤部門（情報館）で管理するほぼすべてのシステムやサービスが更新されます。従来通り利用できるもの、利用方法の一部に変更があるものなどについては、システムやサービスによって異なります。詳細は、随時学内掲示（学務情報システムの掲示板等を含む）からご案内していきます。

今回のシステム更新が、利用者のみなさまの教育研究活動の支援の充実につながるよう努めていきたいと思えます。

【国際交流留学センター】

本センターでは、受け入れ留学生への日本語日本文化教育とともに、国際的視野を持った教員の養成に資することを目的とした教員養成大学ならではの国際交流事業を展開しています。設立6年目となる2019年度の主な活動は、(1)受け入れ留学生教育の運営、(2)学内における異文化交流の活性化、(3)派遣留学生の奨励と支援、(4)附属学校園や地域と連携した国際交流の推進です。活動成果の詳細は、以下の通りです。

(1) 受け入れ留学生教育の運営

2019年度、本学では、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカなど、さまざまな国から約60名の留学生を受け入れました。その中には、文部科学省の奨学金を得て、日本の教育事情を研修するために留学している海外の現職教員(教員研修留学生)が5名おり、うち4名は来年度からの本学での専門教育研修に備えて日本語集中研修を受けています。また本年度後期からは本学が協定を結んでいる大学からの交換留学生も5ヶ国5校から12名受け入れています。本学は、2019年度海外留学支援制度協定受入短期研修・研究型に採択され、11名に奨学金を支給することができました。他に、日本語・日本文化研修留学生9名や研究留学生、私費での学部生、大学院生、研究生が本学で学んでいます。

本センターでは、通常の授業の他に、「来日前準備キット」を送付して留学前からの学習を促進したり、文楽鑑賞や旅行などの文化体験の場を提供したりしています。本年度は、新型コロナウイルスの影響で、大相撲見学が中止になったことは残念でした。限られた授業数の中で、幅広い日本語レベルの多様な留学生を受け入れるという難しい問題に直面しつつも、小規模大学ならではのきめ細やかな指導を行っています。

また、留学生の学習成果発表会は、全学に公開で実施しています。たとえば、8月には「日研生・交換留学生最終発表会」、12月には「米国協定校からの留学生による発表会」、1月には「日本語コミュニケーションプロジェクト成果発表会」、3月には「教員研修留学生修了発表」を行いました。このうち、「日本語コミュニケーションプロジェクト成果発表会」では、「奈良の伝統と現代の人々」をテーマに、日本語による口頭発表を行いました。これにより、本学の学生が留学に興味をもつことを期待しています。



課外では、自然環境教育センター奈良実習園において、田植えや稲刈り、芋掘りのほかに、もちつき体験を実施しました。

(2) 学内における異文化交流の活性化

① 留学生・日本人学生の共修機会の提供

本学では、留学生と日本の学生とが共に学び合える機会を多く提供しています。具体的には、留学生対象科目「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」のほか、専門科目「教育課程演習」、教養科目「教師のための多様性理解」で一部合同授業を行いました。

前期の留学生対象「日本語文献講読(言語)」の一部では、日本人学生希望者が参加して、国籍やアイデンティティの概念について議論しました。

後期には、附属小学校 5 年次の「外国語」で、留学生科目「日本語コミュニケーション」の受講留学生 16 名が自国紹介と交流を行いました。この準備活動には、本学の学生も参加しました。また、学部科目「日本語教育論」では、留学生 15 名が、附属中学校の 1 年生の特別活動において、異文化理解の授業を行いました。学習成果を活用して、よい教育実践をすることができました。

他にも、留学生と日本の学生とが共に学ぶ授業が種々用意されています。

②学内における国際交流活発化のための取り組み

授業以外にも、国際交流の場を用意し、留学生と日本の学生とが出会える機会を多く提供しています。現在、約 40 名の学生が留学生サポーターとして活動しています。

4 月の「留学生と友だちになろうキャンペーン」には、インド、コスタリカ、ルーマニア、フランス、中国、韓国からの留学生が自国紹介のブースを出し、自国の料理や遊びを披露し、参加者と交流を深めました。

9 月には、新入学留学生と日本の学生による「ならまち散策」イベントも開催されました。

また、本学ボランティア・サポート・オフィスとの協働により、毎月 1 回、国際交流室にて、留学生と日本人学生有志による国際交流の会『なつきょん's Café』を開催しています。さまざまな文化的背景をもつ学生たちの交流の機会になっています。

なお、5 月には、協定校のセントラルミシガン大学から「Global citizenship」という科目の履修生 13 名と教員 2 名が来訪し、本学の施設や附属小学校を見学した他、本学の元派遣留学生と交流を行いました。

また、12 月 15 日には、本センター主催で、「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」と題したシンポジウムを開催しました。



奈良市の小学校教員や大阪市の中学校・高等学校教員、四日市市の教育委員会指導主事から、今日的な教育課題について話題提供をしていただきました。また、本学の吉村雅仁教授が、「学校教育におけるグローバル人材育成を担う教員に何が必要か？」というテーマでの講演を行いました。実践的な内容で、本学の学生にとっても、グローバル化がすすむ社会で必要とされる教員の資質や能力を強める貴重な機会になりました。

（3）派遣留学の奨励と支援

日本の学生の海外留学が促進される中、本学では 2019 年度、国際交流協定校 3 校に 1 名ずつ、計 3 名の学生を派遣しました。アメリカが 2 校、および、ハイデルベルク大学です。本センターでは、学生支援課と連携して、多くの学生に留学に関心をもってもらうための活動をしています。7 月には派遣留学生の帰国報告会を行ったほか、本学の卒業生で、現在は奈良市教育委員会におつとめの中口岳先生にお越しいただきました。中口先生は、本学在学中のセントラルミシガン大学への派遣留学のほか、教職についた後のイギリスでの研修についてお話しください、留学経験がいかに人を成長させるのか、積極的に説いてくださいました。

本年度の新しい試みとしては、1 月に教養科目「教職へのキャリアデザイン」において、本学卒業の奈良市教

育委員会の坂本友香先生をお招きし、在学中の交換留学経験を交え、学校のグローバル化に対応する教員の資質能力について講義していただきました。このようにして、必ずしも留学に積極的でない学生にも、海外に目を向ける機会を用意しています。

なお、派遣が決まった学生には、派遣留学生壮行会を実施した他、渡航前オリエンテーションを実施したり、現地では高額な教科書や教材などの購入資金を援助するための海外派遣留学生支援奨学金を設けたりなどして、積極的に支援しています。帰国後の12月には、学長と帰国派遣留学生との懇談会を開催しました。

(4) 附属学校園や地域と連携した国際交流の推進

① 附属学校園との連携

本学では、留学生と日本の学生とが共に、附属校園でさまざまな実践を行っています。たとえば、7月には、大学院の「日本語教育学特講」を受講する留学生が、附属幼稚園5歳児クラスで文化紹介を行い、本学学生の有志がこの活動の授業参観を行いました。



また、アメリカからの留学生が、附属小学校の「外国語」の活動に参加し、本学学生が参観しました。

11月には、附属中学校「特別活動（奈良めぐり）」の

一環で、留学生科目「日本語教育論」の受講留学生が、1、2年生の生徒のインタビューに応じました。この活動にも、日本の学生1名が協力者として参加しました。



② 地域貢献

留学生と日本の学生とは、学校現場での地域貢献も行っています。7月には、日本語・日本文化教育及び地域交流の一環として、教員研修留学生1名が本学学生有志とともに山添中学校の特別活動に参加し、中学生と交流しました。本学と山添村との地域連携協定に基づくこの企画は、本学の留学生にとっても、山添中学校の生徒にとっても、そして、この企画と一緒に参画した日本人学生にとっても、かけがえのない異文化理解の場になりました。

本学図書館の絵本のひろばでは、留学生と日本人学生が自国の絵本を母語と日本語で読み聞かせるイベントを行い、附属幼稚園の子ども達や、本学の学生、教職員が参加しました。

8月末から9月初めには、本学理数教育研究センターが実施した「サマースクール in 曾爾」に教員研修留学生1名が、本学学生とともに参加し、曾爾中学校の生徒を対象とした理科の授業を行って、好評を得ました。



このようにして、本センターは、本学の国際交流の基本方針の一端を担っています。次年度も引き続き、留学生プログラムの充実に努めるとともに、日本の学生と留学生との共修や、附属学校園等との連携につとめていきます。そして、留学生教育と連動させながら、グローバルな視点に立った教員養成に資する活動を行っていく所存です。



さらに、地域の学校や団体からの依頼に基づき、地域の国際交流活動の推進に努めました。

以上のように、本センターでは、留学生に対して日本語日本文化教育を提供するだけでなく、留学生プログラムを核にして、学内における国際交流の環境を醸成すると共に、その活動内容や成果を必要に応じて学内外へ発信しています。また、海外協定校派遣留学生が得た成果を、帰国後に学内に効果的に還元させることにも取り組んでいます。その他の活動の詳細は、国際交流留学センターのホームページ (<http://cies.nara-edu.ac.jp/>) で紹介しています。



【特別支援教育研究センター】

1. 活動概要

特別支援教育に関わる理論と実践に関する教育研究を総合的に行い、特別支援教育を担う人材の養成に寄与するとともに、地域における児童生徒等の教育的ニーズに応じた特別支援教育推進に貢献します。主な事業内容は、①特別支援教育の内容と方法に関する理論的実践的研究、②教育学部、大学院の特別支援教育に関わる人材養成とスクールサポーター、特別支援ボランティア等の学生の研修等の実施、③発達障害もしくはその疑いのある幼児から高校生を対象とした教育相談・発達相談、④教育委員会等と連携した共同研究、⑤特別支援教育に関する公開講座および研修の実施です。スタッフは、児童精神科医、臨床心理士などの専門家です。平成28年度から「学校教育体系全体を視野に入れたインクルーシブ教育システムの構築と合理的配慮・ユニバーサルデザイン教育の開発」に取り組み、今後よりいっそう地域連携に基づく教育相談・発達相談の充実を目指します。

2. 平成31年・令和元年度研修事業

【公開講座】

① 「障害を持つ息子へ～息子よ。そのまま、いい～」 (R1.5.18 (土))

講師：神戸金史 氏
(RKB 毎日放送報道局次長兼東京報道制作部長)

② 「思春期心性と発達障害」 (R1.7.23 (火))

講師：根来秀樹
(特別支援教育研究センター長／児童精神科医)

【教育セミナー】

① 「寄り添うやさしさと、立ち向かう強さと～少年院 の子どもたちとともに歩んで～」(R1.12.11(水))

講師：中野レイ子 氏 (元少年院院長)
奈良県立教育研究所特別支援教育部と連携して開催した教

育セミナーです。

② 「心理検査の効果的な活用―学級担任のアイデアから学ぶ―」

(R2.2.15 (土))

発表者

安里健志 氏 (大和高田市立磐園小学校／教職大学院在籍中)

山本博樹 氏 (奈良市立平城小学校／教職大学院在籍中)

奥田由貴子 氏 (生駒市立壱分小学校／教職大学院在籍中)

柳生章恵 氏 (生駒市立鹿ノ台小学校)

ファシリテーター：大西貴子 (学校教育講座／臨床心理士)

アドバイザー：根来秀樹 (特別支援教育研究センター長／児童精神科医)

3. 平成31年・令和元年度相談事業

【保護者・子ども向けプログラム】

① 寺子屋

学習困難のある児童を対象とした学習支援です。一人一人の子どもの特性に応じた教材を使用しながら支援を行っています。少人数（登録制）の学習支援を月2回（第2・4水曜日 16:00～17:00）、実施しています。

スタッフは教員を目指す学生が中心となっており、子どもの興味関心に合わせてゲームで学べる教材を作ったりと、子どもが楽しんで学習できる工夫を考えており、子どもだけでなく学生にとっても学びの場となっています。



勉強のあとはちゃんばら
ごっこで遊びました。



② 夏休み!!宿題おたすけプロジェクト

(R1.8.5(月) 7(水) 8(木))

本年度も発達障害のある子どもたちを対象とした学習支

援プログラムを実施しました。学ぶ力はあるのに、衝動性や注意集中困難、読字書字困難、こだわりや感覚過敏などの認知や感覚のアンバランスによって通常の指導ではうまく学習が進まない子どもたち。教育大学ならではの環境を活かし、教員を目指す学生、教職大学院で学ぶ現職教員が「おたすけ隊」になり、センターの発達障害を専門とする臨床心理士、児童精神科医らスタッフとともに、3日間、たくさんの夏休みの宿題に取り組みました。今年は「おたすけ隊」の専門性を活かした学習コーナー（英語先取りレッスンや地図マスターなど）や工作コーナー（ロボット工作や織り染め体験など）が増え、子どもたちも楽しみながら課題に取り組むことができました。

学習支援プログラムの裏で、保護者はペアレント・トレーニングを受講します。「子どもの学習支援」、「ペアレント・トレーニング」、「学生や現職教員が発達障害のある子どもたちへの支援方法を学ぶ研修」を兼ねたプログラムとなりました。



集中力 100 倍アップ席 iPad と連動した「やる気ペン」で自分の頑張りを確認しながら課題に取り組みました。

今年の目玉とも言えるロボットラボ！目が光るかわいロボットが生まれました。



最後はアイスパーティーで、3日間の疲れをいやしました。



③ 鉄オタ倶楽部

発達障害のある子どもたちが自分の興味や関心をとこと

ん追求しながら集団の中で社会的スキルを学ぶことを目的とした鉄オタ倶楽部は2年目に突入しました。前半は9月の「大回り乗車」（遠足）に向けて、チームで乗車プランを考え、プレゼンを行いました。投票の結果選ばれたプランでの遠足もカメラ片手に思いっきり楽しみました。後半は新メンバーも加入し、3月の活動発表会を目標に、様々なジャンル（撮り鉄、前面展望、音鉄、Nゲージ、鉄道PVなど）ごとにチームを結成し、活動しています。子どもたちは互いに電車の写真を見せ合ったり、好きな電車の話をしたりと大好きな鉄道を通じて、友人関係を広げています。



9月の大回り乗車カメラは鉄オタの必須アイテム！思い思いの角度から好きな電車を写真におさめました。

3月の発表会に向けて、予定を合わせて、大学外でも活動しています。



【 教師向けプログラム】

ティーチャートレーニングアドバンス・クラス

発達障害教育にかかわる小中高の現職教員が応用行動分析学を基礎から学び、学校教育現場で正しく活用していくことを目標に勉強しています。毎月第4水曜日の夜間に開講しています。

【 個別相談（発達相談・教育相談）】

平成31年・令和元年度は延228件（2月21日時点）の相談がありました。ホームページからWEB申込みができます（予約制）。

【理数教育研究センター】

優れた理数系教員の養成を目指す当センターの活動では、本学学生の教育ならびに学校現場・地域との連携のもと、令和元年度も多くの事業を企画・立案して実施してきました。以下、それらの一部を紹介します。

1. サマースクール 2019 イン管爾

10年を超える奈良県管爾村との今年度の連携事業は8月31日（土）～9月1日（日）の二日間（1泊2日）で実施しました。内容は以下の通りです。

1日目

- ・ 開校式
- ・ 「チリメンモンスターをさがせ」、「虫取り」
（小学生対象、大学教員が実施）
- ・ チャレンジ・サイエンス
（中学生対象の理科・数学ブース、
学生・教員研修留学生在が実施）

2日目

- ・ サイエンス・ルーム
（小学生対象の理科・算数ブース、学生が実施）
- ・ チャレンジ・サイエンス
（中学生対象の理科・数学ブース、
学生・教員研修留学生在が実施）
- ・ 閉校式



教員研修留学生の授業

また、国際交流留学センターとの協働で、本学に教員研修留学中の先生(韓国)に、中学生対象の化学分野の授業をして頂きました。2日間の様子は当センター・ホー

ムページにも掲載しているのでどうぞご覧下さい。

このサマースクールは本学の特色プログラム「スーパー・サイエンス・ティーチャー (SST)」の一環です。学生は理科・算数・数学の教材研究とともに、小学生・中学生、また学校現場の先生方と接していく中で教育現場での実践経験を積んでいきます。



虫取り



チャレンジ・サイエンス



サイエンス・ルーム

2. サイエンス・スクール 2019 in 五條

五條市教育委員会との連携の下、8月5日（月）、6日（火）に開催しました。この活動は、理科や数学（算数）の専門家による様々な実験・演習や体験活動を通し、児童・生徒の理科や数学（算数）に関する興味・関心を高める事や現職教員の方々の参加によって普段の学校での実験授業の参考にしてもらい、授業力の向上を図ることを目的としています。会場の五條小学校の教室では、子供たちの真剣なまなざしと歓声に包まれました。

開校式の後、次の4つの講座を開講しました。

- ・ 「一刀切り図形を作ろう！」
（担当：伊藤直治 教授・高橋 亮 准教授）
- ・ 「プラネタリウムを作ろう」
（担当：信川正順 准教授）
- ・ 「チリメンモンスターをさがせ！」
（担当：藤井智康 教授）
- ・ 「液体？ 固体？ なぞのダイラタンシー」
（担当：常田 琢 准教授）



全体を通じて本学の学生たちもサポーターとして参加し、実験助手を務めたり、子供たちへの支援を行ったりと活躍しました。



3. 「サイエンスチームなら」科学研究実践活動発表会

9月28日（土）に奈良県立教育研究所にて「サイエンスチームなら」科学研究実践活動発表会を実施しました。この発表会は奈良県立教育研究所と連携し、県内の中学校、中等教育学校、高等学校及び特別支援学校における科学研究実践活動の振興を図るとともに、生徒の科

学に対する興味・関心及び、探究的な活動に関する技能・表現力を高めることを目的としています。本センターからは、片岡佐知子准教授と信川正順准教授が講師として参加しました。中学校、高校からそれぞれ4テーマ、計8件の口頭発表が行われました。ポスター発表では中学校から4テーマ、高校から6テーマが発表を行い、本学附属中学校の生徒による発表もありました。



4. 高校生のための素粒子サイエンスキャンプ「Belle Plus」

高エネルギー加速器研究機構（KEK）との共催で、高校生を対象とした素粒子サイエンスキャンプ「Belle Plus(ベルブリュス)」を8月5日（月）～8日（木）の四日間（3泊4日）で開催しました。このキャンプは、KEKの Belle 実験で実際に行われている最先端の研究活動を高校生に体験してもらうことを目的として、平成 18 年度より実施しています。13 回目となる今回のキャンプには、北海道から沖縄までの全国各地、さらにイギリスからの参加もあり、合計 24 名の高校生が集いました。本センターの片岡佐知子特任准教授は、実行委員長としてキャンプの企画・運営に携わるとともに、実習の指導にあたりました。

キャンプの中核となる実習では、Belle 実験で使用されている粒子測定器や実験データなどを活用した以下の 4 つの課題を実施しました。

- Belle の実験データの中から粒子を探索する研究
- 自作したワイヤーチェンバーを用いて宇宙線（ミュー粒子）の降り注ぐ角度を測定する研究
- 宇宙線（ミュー粒子）の速度を測定する研究
- Belle 実験で観測可能な現象の理論的研究

閉会式では、2008 年ノーベル物理学賞受賞者で、高エネルギー加速器研究機構名誉教授の小林誠教授が、サプライズで登場して下さり、高校生から大きな歓声が上がっていました。また、小林教授から高校生一人一人に修了書が手渡されました。高校生からは「とても貴重な経験で忘れられない思い出になった」といった感想が寄せられました。



実習の様子



施設見学

【自然環境教育センター】

1. 実習園の新たな利用方法

2018 年 2 月に発覚した奈良実習園の建物のシロアリ被害で講義室などを利用できなくなったため、2019 年度は利用方法を全面的に刷新しました。講義室などのある事務棟は基本的には倉庫として位置づけて、一時的な利用にとどめることとなりました。そのために様々な代替措置を講じました。

まず事務室機能は、新たに設置した仮設事務室で対応しています。次に、実習園で行ってきた授業や公開講座等では、講義室と田畑の両方で行ってきましたが、1) 青空教室の利用(小学校生活, 初等教科教育法(生活), 公開講座「米作り体験学習」), 2) 実習園・高畑キャンパス間の移動(この利用はありませんでした), 3) 理科棟北小農場および理科棟 R1-111 と R1-113 の利用(中等教科教育法Ⅲ(技術)), 5) 仮設事務棟の利用(栽培実習, 小学校生活(キャンプ実習), 公開講座「畑で汗を流しませんか」), 6) 作業室での講義(小学校生活(キャンプ実習), 公開講座「米作り体験学習」), の6通りの方法で凌いでいます。利用者には不自由な部分がありますが、いまのところ大きな混乱はありません。とはいえ、抜本的な解決策が必要です。

2. 公開講座「米づくり体験学習」

恒例となっている「米づくり体験学習」では、2019 年度も田植えや稲刈り、餅つきなどを通して米づくりの面白さや大変さを学ぶ機会を提供しました。この公開講座は講義と実践を組み合わせを行い、毎回の講義では技術教育講座の箕作さんによる米づくり作業の紹介に加え、イネの種類やその特徴、脱穀や粃摺り、精米などの手順、コンバインや粃摺り機などの大型機械、千歯抜きや脱穀機、唐箕といった昔ながらの農具についても紹介しました。実践では手作業による田植え、鎌を使った稲刈り、稲穂を乾燥させる「はさがけ」、千歯抜きや足踏み式脱穀機

を使った脱穀(図 1)、手回し式の唐箕を用いた粃殻の除去など、米づくりに関する一連の作業を体験してもらいました。現代ではコンバインを用いて稲刈りから脱穀まで済ませてしまうことが多いですが、手作業で田植えや稲刈り、脱穀など一連の作業を行うことで、米がどのような過程を経て我々のもとへ届くのかを学ぶことができました。



図 1. 足踏み式の脱穀機で稲穂から粃を回収する様子

3. 公開講座「夏の森を親子で楽しもう」

奥吉野実習林が紀伊半島大水害により使用できない状況となっているため、2019 年度の公開講座「夏の森を親子で楽しもう」は吉野郡上北山村において行いました。現地に到着した参加者たちは、まず生活拠点を作るためにテント設営から始めます。いまにも雨が振り出しそうな空の下で、慣れない巨大なテントを家族が力を合わせて建てていました。夕食を作る際にも、電気やガスは使えません。湯を沸かすのも米を炊くのも、すべて薪割りや火起こしから始める必要があります。さまざまな不便を感じながらも、参加者たちはアウトドアでの料理を楽しんでいる様子でした。二日目は朝から和佐又山へ登り、自然観察を行いました。天気は少し悪かったですが、霧がかかった森の景色が美しく、楽しい登山となりました(図 2)。他にも、北山川で川遊びをしたり、夜の自然観察に出かけたりと、さまざまな形で自然と触れ合う機会を設けました。ま

た、身近な生き物についての講義や、自然の草木を使った工作の体験なども組みこんだ、盛りだくさんの内容でした。



図 2. 和佐又山に登る参加者たち

4. 実習林の砂防堰堤工事進捗

奥吉野実習林で深層崩壊が起こっておよそ 8 年半になります。その間にも大きな台風が来るたびに砂防堰堤工事は巻き戻しを余儀なくされてきました。とはいえ 2019 年度はようやく当初計画にあった 3 つの砂防堰堤のうち、最後の 3 号砂防堰堤に着手するに至り、2020 年度以降には排土工+緑化工に着手する予定です（図 3）。だいぶ終わりが見えてきましたので、そろそろ実習林施設の復旧に関しても本格的に動き始めたいと思います。



図 3. 砂防堰堤計画 (<http://www.kkr.mlit.go.jp/kiisankei/map/3.html> 2020 年 1 月 23 日確認)

5. 奈良教育大学防災訓練プロジェクトチーム

2015 年に本学の自然環境教育センター、理数教育研

究センター、保健センターが協働して開始した“センター協働防災教育プロジェクト”も 5 年目を迎えます。これまで学長裁量経費の支援を受け様々な取り組みを実施してきましたが、本学における防災教育の普及はまだまだであり、俯瞰すると教師を志す本学学生の防災意識は未だに低いと言わざるを得ない状況です。2018 年度に本学運営会議にて“奈良教育大学防災訓練プロジェクトチーム”の設置が決定され、2019 年度も同チームによる本学の防災訓練に向けた企画・運営に加え、本学防災システムの向上及び防災教育を視野に入れた活動が展開されています。プロジェクトメンバーには、学生団体の代表者等若干名も参加しており、参加者を中心とした防災訓練における学生企画の運営や学生消防団の結成、さらには卒業研究課題としての活動が実施されています。さらには、今後本学教員による学部授業の開設も計画されており、本学学生の防災意識の向上につなげる努力がなされています。

6. 教員免許更新講習「奈良の自然災害を知って子供を守る～防災教育入門～」(8・10 月実施)

本講座は今年で 4 年目を迎え、例年どおり本学の教員に加え、国土交通省、奈良県知事公室防災統括室、奈良県教育委員会からの講師を迎え、現職教員に向けた防災教育を行いました。具体的には、無料で使えるインターネット上の地図サービス（地理院地図、今昔マップ、ハザードマップポータルサイトなど）を紹介、奈良県域を中心とした紀伊半島周辺の地質と地形の成り立ち、活断層との関係、奈良県を含む紀伊半島における土砂災害とその対応、防災教育推進プランの紹介や思考シミュレーションの手法を用いた課題を扱いました。防災教育においては、本学の学生への教育という“未来の教育”に対する視点も大切ですが、それと同等に地域の教育を支える現職教員の“現在の教育”に対する視点も大切です。今年度も 8 月と 10 月の 2 回実施されましたが、いずれも 50 名の定員が埋

まる状況でありました。この４年間で受講した教員数は、
約 400 人となりました。詳細はプロジェクト HP にて紹介しています。

センター協働防災プロジェクト HP URL:

[http://mail2.nara-
edu.ac.jp/%7Emasaki/Center_Cooperative_Education_
Project_for_Disaster_Prevention/EPDP_Home.html](http://mail2.nara-edu.ac.jp/%7Emasaki/Center_Cooperative_Education_Project_for_Disaster_Prevention/EPDP_Home.html)



図書館

<https://libwww.nara-edu.ac.jp/drupal/>

次世代教員養成センター

<https://jisedai.nara-edu.ac.jp/>

国際交流留学センター

<http://cies.nara-edu.ac.jp/>

特別支援教育研究センター

<http://cp-support2.nara-edu.ac.jp/hp/>

理数教育研究センター

<http://nesm.nara-edu.ac.jp/>

自然環境教育センター

<https://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/>



奈良教育大学

〒630 - 8528 奈良市高畑町

奈良教育大学教育研究支援課

TEL : 0742 - 27 - 9303

E-mail: kyoken-shienka@nara-edu.ac.jp